



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2003年3月発行(3ヵ月1回発行)

第18号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 貧しい国々での医療活動を支援 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

事務局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-27-6 パイナル内 TEL&FAX 03-3370-7654

## 巻頭詩

### チョウチョウ

まど・みちお(詩人・児童文学者)

まど・みちお：明治42年山口県生まれ。台北工業卒。国際的な評価も高く、「アンデルセン賞」その他数多くの賞を受賞。著書に「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻が長いのね.....)や、「まど・みちお詩集」「宇宙のうた」ほか多数。動物に関する詩20編は美智子皇后が英訳するなど、話題になりました。掲載の詩は、作者の快諾を得て転載しています。

ちきゅうには  
チョウチョウが います  
なんとなく います  
みちばたの ちいさな くさに  
ちいさな はなが  
匂っている みたいに

ちきゅうには  
チョウチョウが います  
ゆめのように いてくれます  
ちきゅうの ここに  
あたしという おんなのこが  
いるから みたいに



まど・みちお詩集『ぼくが ここに』童話屋より カット/松岡裕子

## 寄稿

### 「日本の貴婦人」をめぐる

稲木紫織（フリーライター）

『日本の貴婦人』（光文社）を読み、日本の重要文化財並にたいせつにしたい本だと思いました。当時の「日本の貴婦人」の印象を、インタビュアーの本人に直に語ってもらうことにしました。なお、文中の「伊藤ローザさん」とは、海外と文化を交流する会理事の伊藤英子さんのことです。（松岡）

数年にわたって若い女性向けの月刊誌「CLASSY .」（光文社）で連載していた「日本の貴婦人」というインタビューが一冊にまとまり、1999年、同社から出版されました。太平洋戦争終結時の外務大臣を務めた東郷茂徳の娘、東郷いせさんを皮切りに、作家の朝吹登水子さんまで、様々な貴重かつ印象深いお話を伺いましたが、単行本には17人にご登場いただいています。

取材後、鬼籍に入られた方も多く、徳川慶喜公の孫、徳川喜和子さん、“加賀百万石”の酒井美意子さん、取材当時100歳目前であった日本画家の小倉遊亀さん、前述の東郷さんも故人となりました。現在も親しくさせていただいている方もいらっしゃいますが、取材当時から今に至るまで実感しているのは、貴婦人とはエレガントながら決して気取った存在ではなく、ヒューマニティーとユーモアに満ちているということ。彼女たちの誇りは表面的なものではなく、その生きるさまのなかに静かに脈々と伝わっている、ということです。

連載当時から愛読して下さっていた、作家の林真理子さんに寄せていただいた前書きにこうあります。「苗字を聞けば誰でも知っている政治家の子孫もいれば、日本の伝統に携っている家の女性もいる。戦前に海外で教育を受けた方もいれば、昔からの日本女性としての躰けを身につけた方もいる。共通しているのは、“ノーブレス・オブリージュ”ということであろう。貴族には貴族としてふるまう義務があることをみなさん、見事に実行しておられる。それは別にボランティアをしていたり、社会的に意義ある仕事に就いているということだけではない。美しい自分をまわりに見せるということも、選ばれた人たちの大切な義務であろう」

徳川喜和子さんは、私が最後にお見かけしたコンサートで、80代でいらしたものの、肩と腕を出したローブ・デコルテを、すうっと伸びた背筋でまさにエレガントに着こなしておられました。取材時に印象的だったのは、「昔はともかく今はお姫様じゃないんだから、ごきげんようって挨拶して驚かれるところへは、コンチハ～って行くのよ」という言葉です。藤原定家の子孫として京都の“歌の家”を守り続ける冷泉布美子さんは、おっとりした話し方が王朝歌人を思わせ、「いつからこの家にお住まいなのですか」という質問への「応仁の乱以来……」というお答えには思わずため息が出ましたが、「私、オテンバばあさんなのよ」と高らかに笑われたのには、もっとびっくりしました。

林さんは、「いずれにしても、大正、昭和の初期という時代、日本にも本当に貴族という人種が存在していたのである。そこに生まれた彼女たちは単に贅沢に育てられただけではない。

選ばれた者の重圧を背負いながら、美しく生きることを常に心がけていたし、そこにはおのずから厳しさがあった」と続けています。その生き方で私が最も感銘を受けたのは、子爵令嬢として英国王室ジョージ6世のコートに社交界デビューした経験を持ち、ボランティアの功労でエリザベス女王からC.B.E勲章を授与された伊藤ローザさんです。神戸のご自宅をお訪ねし、あまりに謙虚で温かい人柄に魅了されましたが、後に取材日の午前中、医師からガンを告知されていたことを知りました。入院、手術を経ての退院後、なぜそんな大変な時に取材を受けてくださったのか伺うと、「みなさん、忙しい方たちがわざわざ東京からお見えなのですもの。それに私もとても楽しみにしていたのですよ」。しかも取材中、私はローザさんがかつて、他の部位のガンを患われたことに触れているのです。その時、彼女は「ガンだと先生から直接言われた時、驚かなかったと言えば嘘ですけど、でも家族や友人でなく、私でよかったと思いました」と穏やかに微笑みながら語られました。

ローザさんはクリスチャンでいらっしゃいますが、聖人でもいざとなると取り乱すこともあるでしょうし、誰もそれを責めることなどできはしません。しかし、「このベルト、バザーで700円だったのよ」などとこちらをなごませるお心遣い、そして実際インタビューを楽しんでくださったであろう嘘のない真摯な姿勢に、私は深く感じ入ったのでした。

ローザさんを始め、彼女たちを知りえたことは、人間いかに生きるべきかという命題において私の精神的支柱であり心の財産となっています。そして、“コンチハ～”だの“オテンバばあさん”だの“ベルト700円”といったお茶目な台詞を思い出す度、私は電車のなかでも街を歩いている、ふっと笑みを浮かべずにはおれないのです。

## 祈りのネグトロピー 人間精神のいのちの原点回帰へ向けて

佐藤純一（東京大学元客員教授）

2002年11月から始まった新しい「つどい」シリーズの第1回ゲストスピーカーだった佐藤さんからご寄稿いただきました。人工ダイヤモンドを日本で初めて開発したこの工学博士は、人間の本质を探る哲学にも造詣が深く、このような寄稿になりました。

### いつの間にか祈りを唱えていた私

「……ナム……」、「……ゴッド……」、「……アラー……」、かしわ手の音など壇上のさまざまな宗教者の代表が、それぞれ日常欠かさずに捧げている祈りのなかで、会場の数百人の参加のひとびとと一緒に頭を低くしているうちに、ふと気づくと「南無阿弥陀仏」を心の奥で唱えていた。そして、その日1日、参加メンバーと平和、人権、家庭、女性に関する現代の課題についてこころおきない討論のできる土俵にたてたような気がした。

これは、昨年2003年6月24日から5日間にわたってインドネシアの古都ジョグジャカルタで開かれた「アジアの和解と協力」を総合テーマとする第6回アジア宗教者平和会議の場だった。その運営母体は、現在白柳誠一カトリックローマ枢機卿を理事長とし、比叡山宗教サミットを開かれた杉谷義純師を事務総長とする世界宗教者平和会議で、このアジア宗教者平和会議はプロテスタント系の聖学院大学の飯坂良明学長が務められておられた。さらに日本からは神道、仏教界のトップの方々も献身的に運営に加わって実現されたユニークな場でした。かくい

う私は、宗門人別には入らないものの縁あって浄土真宗と曹洞宗の先生に長年指導を得る機会に恵まれ、技術の現代の問題を宗教者の方々と考え、論じ合うことの大切さから、この活動に参加する幸いに恵まれた次第である。

こうして仏教、キリスト教、神道、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教、シーク教、ゾロアスター教、バハイ教、儒教、道教など、教義レベルになれば忽ちにして口角泡を飛ばず論争が起り、現に戦争の火種となっている諸宗教から集まって一緒に祈っている。いつしか私も唱えている。こうして参加者が皆、現在のホットな問題を忌憚なく論じ合える土俵に上げれる、どうしてだろうか。これについて私なりの考えかたを述べることをお許し願いたい。

### 自然界の現象の変化を記述するエントロピーとは

ここで言葉を使う以上、若干専門的にはなっても、概念の説明をしておかねばなるまい。

一般に、自然科学は、唯一の例外を除いて等号あるいは等式で表示、記述される命題からなる体系である。すなわち「……は、……に等しい。あるいは同じである」という記述で、難しげにいうと同一性の記述、あるいは結局は「同じこと」をいうのだから広い意味で同義語反復、すなわちトートロジーの体系なのである。外界とは孤立した閉じた系(これを専門的には閉鎖系という)の中では、例えば一つの化学反応装置において内部で起こる化学反応の反応物質の質量の合計と生成物質の質量の合計は等しい。つまり物質は、生成も消滅もしない。これが「質量保存の法則」と呼ばれる有名な法則である。また、はじめのエネルギー源から動力や運動や熱や電気に変えて使ってもそのエネルギーの合計ははじめのエネルギーの合計と変わらないというのが「エネルギー保存の法則」として知られている。環境、資源問題の解決のために、ものとエネルギーを完全にリサイクルすれば出来るという主張はこの法則の限りでは間違いではない。が、ここに立ちはだかるのが、熱力学第2法則であり、エントロピーの法則と呼ばれる法則である。

自然現象で「変わる」というのは、はじめの状態が違う状態に移るといって芳香性を盛っている。前述の「等号」の世界では変化の向きはどちらでも取りうる。しかし、私たちのまわりで起こるごく普通に知られる現象を取り上げてみよう。まずは熱の移動である。熱は、高温側から低温側には自然に流れるが、逆には自然には流れない。これには必ず外から新しい熱を加えてやらなければならない。もしそうでなければ、氷の上に水を入れたやかんをのせてお湯が沸かせることが出来、エネルギー危機などはないはずになる。もう一つ別の例として、コップに水を入れて、上からインクを1滴落として放置しておく、インクは自然に拡がってコップ全体の水に一樣に混じってしまう。これが逆に、自然に元の1滴のインクと水に戻ることはない。

さてこのように、放置しておけば自然に変わってしまう尺度として変化が生ずれば必ず増える向きで変わる量としてエントロピーが定義されたのである。今の例でも分かる通り、自然界で、物質の集まりである系は、放置しておかれるといずれは放熱や先のインクと水の系のようにある明確な状態から全体の混合した無秩序の状態になってしまう。ここで熱も本質的には、原子や分子の不規則な熱振動と呼ばれる状態のエネルギーに最終的にはなってしまう。そしてもうこれ以上変化のしようのない、つまりエントロピーが増えようのない状態、すなわち無秩序のきわまりが、その系の最終状態で、いわば「死」である。熱力学では、これを「熱死」と称する。

## 生命体は部分的変化したり活動したりしてもなぜ一定の状態でいられるのか　ネグントロピーの作用

この世界では、変化や活動はおこないながらも、ある期間は、時々あるいは日々同じ状態を保っているものがある。それは私たち人間も含めた生命体である。変化を含んで生き、活動しているのだからエントロピー的にはいったいどう考えればよいのだろうか。量子力学の基礎方程式で名高いシュレディンガーは、著書「生命とは何か？」で次のようにいっている…… 1 )。拙訳で恐縮だが、ここに引用する。

「われわれを死から守ってくれる食物に含まれている大切なものはいったい何であろうか？ 答は簡単である。すべての過程、事象、出来事、これら自然界に起きることはすべて、それが起きている世界のエントロピー最大という危険な状態に近づこうとする。こういう成り行きから離れて生き続けることができるのは、そのまわりから絶えずネガティブ(負の意味)エントロピーを取り込むことによつてのみ可能となる。では生命体が食するネガティブ・エントロピーとはいったい何か？ パラドックス的というと、新陳代謝の基本は、生命体が生きている間に生成せざるを得ないすべてのエントロピーを相殺することである」

これをエントロピー的に正しくいうと、エントロピーは定義からして負を考えるのではなく、人間を例にとつて、私たちが生活や諸活動で増加したエントロピー分を、体温による放熱、汗、あるいは汚くて恐縮だが糞尿として身体外へ排出し、代わりに食料、水などの低エントロピー分を取り入れて、新たな変化、活動をおこなう。これが日々繰り返り、継続されているのである。これがネガティブ・エントロピーから発想して、ネグントロピー的な働きといわれるものである。

## 祈り、人間精神の「いのち」を守るネグントロピーのはたらき

ひとが、人間として生きるということは、動物的体の生命体としてではなく、身体と一体となった靈魂との融合的生命体としてである。したがって日々の精神的変化や営みで秩序性が崩れエントロピーが増加し、精神的熱死から「いのち」を守り、再び活動を同じようにできるようにさせるもの、これこそ「祈り」であると考えられる。前述の物質的生命体でシュレディンガーが指摘した低エントロピーの食料に当たるのが、祈ることなのである。

いみじくも藤吉慈海氏が述べている「人の精神をいつも奥底にある宗教的な生命に目覚めさせる」行い、これが「祈り」であると私は考える…… 2 )。つまり日常の活動、他者との関わりで無秩序化の方向に進んだ精神を低エントロピー状態に戻すネグントロピー的な営みが祈りなのである。

「天にましますわれらの父よ……」、「南無……」、「アラーの神……」、拍手といったさまざまな祈りという作為は、いずれもネグントロピー的な行いに伴う言葉や動作である。そして祈りで訴えられる言葉は、哲学者三木清がしている通り、人知の賢しらな理屈の論述ではなく、「真に超越的なものとしての言葉の言葉」なのである…… 3 )。これは、祈るという行いと一体となつてはじめて人間の精神に働きかけるのである。私がアジア宗教者平和会議で参加者とともに祈りの場にあつたとき、いつしか心のなかでお念仏を唱えていたのは、私の乱れた心を低エントロピーに戻してくださるみほとけの大悲心によるものと深く感涙が溢れる次第である。

1 ) Erwin Schrodinger : What is Life? Mind and Matter(Cambridge University Press,New York,1967)

- 2) 藤吉慈海：法然上人法語集（山喜房仏書林、昭和49年、東京）  
3) 三木 清：パスカル・親鸞、京都哲学選書第2巻（燈影社、1999、京都）

## 会からの報告 & お知らせ & お願い

### 5月24日に海外と文化を交流する会35周年を祝う会

社団法人 海外と文化を交流する会はことし35周年を迎えました。これを記念して会員を中心とした懇親会を催したいと思っております。会員には別途案内状を送りますが、会員以外の方々をお誘いくださって、土曜日午後のひとときを立食形式でワインやお茶、おいしい料理でお楽しみください。

社団法人 海外と文化を交流する会 35周年記念アフタヌーン・ティー・パーティ

日時：2003年5月24日（土） 午後1時30分受付開始、2時開宴～4時30分

場所：東京・霞ヶ関「霞ヶ関三井クラブ」

イベント： 青学大 G.W.ギッシュ教授「文化交流の原点を考える・お話と琵琶の演奏」

茶席・立礼（亭主：山縣宗絹）

グループ「残狼」による和と洋の楽器コラボレート

福引き

その他

会費：5,000円

参加の申し込み、お問い合わせ：03-3370-7654 海外と文化を交流する会事務局まで FAX  
でお願いいたします。

### 身障者へのスポーツ用具（輪投げ）の提供

35周年記念行事の一環として、視覚障害者の全国の73施設を対象に、センサーのついた輪投げを寄付します。この輪投げは、スポーツができにくい障害者が少しでも体を動かせるように、楽しむようにと開発されたものです。5月の祝う会で贈呈をしたいと考えています。

### 理事会・総会のお知らせ

社団法人海外と文化を交流する会の平成15年度理事会・総会を、5月15日（木）午後15:30より、東京・銀座4丁目の銀座教会地下集会室で行います。お知らせと出欠のご案内は、後日郵送いたします。

### 留学生を囲む「つどい」

3月8日(土)のつどい「留学生と語ろうよ」は、8名の留学生を囲む総勢33名という盛会でした。世田谷区北沢の閑静な個人のお宅で、お茶室「凌雲庵」を拝見し、広間にてひな祭りのしつらえを楽しみながら、優雅で豊かな「人と人の交流」となりました。常務理事のギッシュ先生の司会進行が理想的な雰囲気を作ってくださいました。以下は当会支援の留学生の感想です。

王 梅さん(東京外語大・日本文学)

「茶道はいつか勉強したいと思いますが、この集いに参加させていただきましてありがとうございました。お茶の紹介をもっとしていただければいいなと思いました」

林 鵬峰さん(日本大学・マーケティング)

「今日、いろんな方々との触れ合いができて本当に嬉しかったです。このチャンスを提供していただきましてありがとうございます」

馬 潔さん(東洋大学・国際観光)

「今日初めて日本の家に入って、お茶をいただいて、話し合っ、勉強になりました。いい体験でした。ありがとうございました」

## 支援へのお礼

菊地美代子様から、ご寄付をいただきました。ありがとうございました。

## 新入会員紹介

田中由紀子さん(紹介者 宮川和子さん)

もっと行動範囲を広げて、いろいろな人たちに交わって自分をもっと磨きたい、勉強をしたい、私にできることがあったら……など、以前から考えて居りました。昨秋のチャリティ・コンサートでは心豊かな思いでいっぱいになり、素晴らしい方達との出会いに感謝いたします。

## こころざし高い人・松田洋子さん

松岡裕子 海外と文化を交流する会専務理事

長年、会の事務とコンサート係を引き受けてくださった松田洋子さんが、4月から、某名門女子大の舎監の任に着かれることになりました。

会の困難な時代には、微塵のたじろぎもなく、強い信念で会を引っ張ってくださった方です。頼まれた仕事は、単に期日前に仕上げるだけでなく、頼んでない部分にまで心を配って、それも何気なくしておいてくれる……そういう方です。

そのような翼を失うことが、会にとってどれ程の打撃か、自らの力を過小評価して彼女は認めようとはしません。末長い会との繋がりを求めてやまない私達なのですよ、松田さん！

## 海外と文化を交流する会の催し

### つどい

・ **日本文化再発見**.....海外との交流の基本に、日本の文化を再確認し、できれば海外の友人たちに紹介できるようにしたいと考えて、開催している。これまで折り鶴や、香道、茶道ほかを催してきた。年に2～3回、実施する。次回は未定。

・ **海外の文化を考える**.....前回までは青山学院大学ギッシュ教授による「自分発見の技術」にトライしてきた。自分自身のポジション、性格、外国に対する意識など、自分をわかり、コミュニケーションをより深く保つための技術習得だった。今後のことについては未定。年に2～3回。

・ **21世紀を語ろう**.....新規にはじめた「つどい」。この混沌とした時代に、人間の本質を改めてかんがえようという企画。前は今号にご寄稿くださった国際メタテクノロジー研究所・佐藤純一東京大学名誉教授の「幼時に育む正義と勇気」。次回は6月ごろを考えているが、未定。

・ **留学生とのつどい**.....海外からの留学生と、楽しく語らいながら文化の交流をする。3月8日のつどいは大好評だったため、なるべく早い時期に次回を実施するべく検討中。

### 秋のコンサート

2003年秋のコンサートは、11月22日(土)、明治神宮お茶室「桃林荘」で、鯉沼廣行氏の横笛を聴く。

## 会費納入のお願い

2003年度の年会費納入をお願い申し上げます。2002年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 東京三菱銀行渋谷支店 (普) 2266599 海外と文化を交流する会

なお、会員の年会費は次のようになっています。

会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)  
30,000円(法人・団体会員)



海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パイビル内

TEL&FAX 03-3370-7654